

図書館通信

98

1991. 12

物理学の黄金時代

——大学の図書館資料と教育をめぐって——

中山 潔

物理学の歴史の中に、暗い時代の苦悩と生みの痛みを通して初めて迎えた「物理学の黄金時代」があった。それは、おおよそ今世紀初頭から1930年頃までに相当する。専門的に詳しくいうと、アインシュタインによる特殊相対性理論とそれに続く一般相対性理論の創造、量子力学体系の形成と発展、統計力学体系の整備と展開の3つの理論体系の発展の流れと、それらを準備したり実証した実験物理学の輝かしい発展が、この時代の特徴といえる。量子力学の創造に偉大な貢献をし、「不確定性原理」の提唱者として知られるハイゼンベルクが1967年に来日し、小さな会合で次のような挨拶をした。

『世界の文化史のなかに幾度か黄金時代がありました。ギリシャ哲学、ルネッサンスの美術、ドイツ音楽など……。そして今世紀の原子物理学の黄金時代のはじまりに、私はここにお集りの皆様とともに参加したのです。』
何気なく聞える挨拶ではあるが、ハイゼンベルク自身が、プラトン、ミケランジェロ、ベートーベン等と同列にその名を連ねる日を予言するかのような、自信に満ちた発言である。

ハイゼンベルクの云うように、量子力学体系が文化史のなかに黄金時代の代表として位置づけられるべき理論体系であるならば、それは知的文化の枠組の中にどのように後世に伝えられて行かなければならないのだろうか。そのような伝えられ方の中には、理論体系が応用されて理論の適用領域が拡大されて行った事実の外に、理論体系に関する知識論的な評価が含まれていなければならない。例えば、不確定性原理なるものが、自然認識の中でどのような位置づけと価値を持つかと問うてみれば明らかのように、創造の本質と原理の意味に関する価値の評価に重点が置かれなければならないと考えられる。今世紀の初頭、プランクが空洞放射の研究からエネルギー量子の発見に導かれ、後にアインシュタインがプランク理論の本質を検討して光量子論を提唱するに至る一連の過程を例として取り上げてみると、現在学生諸君の手にする物理学の教科書はその本質を全く伝えていないのが殆どである。即ち、理論の結果を提示するのみで、彼等がどのような考察を根拠にして彼等の理論を定立したかという事を正確に伝えている本は殆どない。古典力学についても状況

は同じで、ニュートンが天体の運動を考察して万有引力の構造をどのようにして導き出すことができたかを知っている学生は極めて少ないのではないだろうか。ある碩学が「物理学者には、専ら既知の体系的知識を応用して現象の解明に当る人と、物理学に新しい地平を開く理論や実験に専念する人がいるようである」と述べ、前者を清教徒型、後者を予言者型と呼び、「近年前者がますます多くなり、後者もしくは両者を兼ね備える人が極めて少なくなった」と嘆いていたが、教える側の変化も同質で教育に反映しているのだろうか。本屋で学生諸君が手にする専門書は近年驚く程薄くなっている。そのような本は、選ばれる題材も最小限度に限られ、いたずらに既存の知識の適用ばかりを扱っていて、現代はやりの効率の良さを追求するに急で、突込んだ説明や議論を行わずに済まされ、本の薄さに比例して内容も概して“薄い”。このような状況を考えると、せめて物理学の歴史を画した学説については、原論文の思想に直接触れることがどうしても必要であるように思えてならない。

物理学の黄金時代から20年以上も後に創立された本学の図書館に、その時代の文献が乏しいことは仕方がない。量子力学ができてから65年もたった現在では、進歩の激しい自然科学の常として、量子力学建設当時の文献を研究者が手にすることは殆どない。以前に量子力学を教えていた折、原論文をどうしても参照したくなって、歴史の古い大学にたのんでみた経験がある。しかし、図書室の書庫が足りなくなって1930年代以前の物理学雑誌はダンボールに詰められて書庫の隅に高く積んである状態で、とても取り出すのが困難だからお許し願いたいという返事が返ってきた。増加する文献の量に、大学図書館は何れも悲鳴をあげている。しかし、このような状況は知的文化にとっては大変悲劇的な事ではないだろうか。たしかに相対性理論の「ブーム」の現在では、アインシュタインの論文集は完全な姿で出版されつつある。ボーア、ハイゼンベルク、パウリ、フェルミ、…等々の、物理学の黄金時代を築いた巨匠達の著作集もいくつかは刊行されている。けれども、物理学の黄金時代の文献に接するには、大変な労力と費用を要する状況であるといわざるを得ない。知的文化の枠組の中で物理学を眺めるときに、創造の秘密に直接触れるように、文献学的環境が改善されねばならないであろう。われわれの大学においても、物理学に限らず自然科学の各分野について、大部分が原論文のコピーとなるであろうが、学問体系の創造に関与した重要な文献資料を体系的に整備し、常に学生諸君の閲覧に供することができるようにすることが急務であるように思えてならない。

人間の考えるという能力は、人間に備わった最も優れた特質である。それ故人間について語る人は誰でも、ある段階において人間の知識について言及しなければならない。人間の知識の本質は、「理解すること」に関連して、実際には人間の本性と深くかかわる特徴を持っている。近代の教養理念乃至は現代の科学の中にある最も重大な欠陥は、物質の科学と精神の科学の分裂である。また、知識の客観性という理想は、理性と経験の間、事実と価値の間、精神と身体の間、亀裂を拡大し、「知を求める者」と「知られるもの」との間に裂目を拡大し続けているように思えてならない。この様な知的状況を省みるときに、学生諸君が「知識と人間」について改めて問い直し、諸科学の意味を正しく評価することができるようになるためにも、図書館資料の面に見落され易い空白が残されているように思えてならない。

(理学部 物理)

特集 図書館職員海をわたる

国際化の流れを受けた訳でもないだろうが、ここ数年、外国に出かける本図書館職員の数が多くなっている。しかも、その過半数が、いうところのパッケージツアーでなく、自分で航空券をピックアップした自前の旅行というのが、スゴイ。ホームステイあり映画祭への参加ありである。憧れのスイス旅行を、ホテルの予約無しで行なった剛の者さえいる。もっともローザンヌでは、観光ホテルではない、言うのがはばかりられるホテルに投宿してしまったようだが。本特集は、そうした旅の中でのいくつかのエピソード。

特集 図書館職員海をわたる

Only スマイル *and Yes*

島山百合子

2時間遅れの飛行だった。いつ飛ぶのか分らず、走行毎に今度こそはと思い、その度に力が入って、ようやく上空を飛んだ時には身が軽くなったような気がして大きく深呼吸していた。何事も待つことより進めることの方が楽なのではないだろうかと単純に思ったりしながら。

時差17時間で夜が無いままにシアトルへ。

大幅な遅れで乗継は無理との答がスチュワーデスから返ってきて、その後のトラブルを思う私にとってはあきらめられるものではなく、広い空港を走り回った。

入国手続は検査官の質問の後、私が問い返す間もなく続けて「カンコウ？」ときかれ、「Yes」と答えただけで完了（カナダへ行くにも、乗継の場合には一旦アメリカへ入国）次は Air Canadaの乗り場へ。広いホールの奥にカウンターを見つけ、航空券を見せながら尋ねると「Straight.Next.1st Floor」が耳に残ったが、空港内の移動に Subway を使うなど知らず、Straight は無人のプラットホームへ、Next は空っぽの地下鉄に乗って次の駅で降りること、1st が100段くらいのエスカレーターで昇り終った階であるとは思いつかず、不安は募った。1階で人間を見て「Air Canada カウンター」を教えて貰えた時には本当に嬉しかった。ボーダー券を得、ゲートを通して飛行場に向け降り、Air Canada を見つけてほっとしたのもつかの間、「Come back」と大声で戻される。出発アナウンス前だからとのこと。なぜに私の航空券はヴァンクーヴァー直行ではないのかと歯痒い思いをしたが、プロペラ機から、シアトル→ヴァンクーヴァーの景観を見たとたんにそれも吹き飛んだ。澄みきった青空に真っ白な綿雲がフワッフワッと点在し、次々と見えてくる大小の島々と小さな湾、それに樹木の緑が濃く映え、はるかかなたには雄大なロッキーの山並が白く神秘的な姿で現われ、ファンタージェンを見るように魅せられてしまった。

ヴァンクーヴァーでのホストファミリーは両親と3人の子供達、それにホストフレンドとして、夏休み中に働きながら英語を学びに来ていたケベック州の大学生、香港からの高校生、そしてスイスの若者もいた。

ファザーとマザーは大きく、子供達は赤ちゃんの時には fat で、大きくなるにつれ slim になっている。戸外でよく遊ぶからだろうか。写真が沢山あったが、3人とも同じように変化していた。カナダの大人でダイエットを要しない人は少ない。食事のせいかもしれない。私の home も中国風、フランス風、カナダ風が mix し、ソースもお醤油が加わったりして、いつもおいしかった。主食として、じゃがいもやとうもろこしが度々でたが、バターをたっぷり付けた方がおいしいし、お肉もカナダ特産物であり、デザートにケーキやアイスクリームまで出たりして、よほど意志が強くなければ、ここでのノンファットは望めないようだった。



カナダの自然保護は人々の中に溶け込んでいて、キャンプでもゴミはもちろん、残ったコーヒーまでコンテナに入れて持ち帰っていた。空気はサラサラしていて、人間にとって Comfortable だったが、植物にも影響しているようで、あちこちに咲いている花の色の鮮やかさは想像を超えるものだった。

半地下のベースメントもカナダの美しさに一役買っているように思えた。もともと貯蔵室として作られたようだが、窓が地上にあり、湿度が低いこともあって快適で、物置、子供部屋、ベッドルーム等にも用いられ2階建の必要性はほとんどない。広く緑の多い所に、カラフルな、そして道路から続く芝生の前に沢山の花が咲き誇る1階建の家々は落ちつきがあり、気持のいいものだった。都市では高層ビルが林立し、エドモントンのように見渡す限り広い道路しか見えないような所でも、中心部だけは高層ビルが聳え立っていて異様な感じがした。

図書館は市内に数多くあり、中央図書館はダウンタウンの大通りと大通りのコーナーで、隣りに大きな本屋が、その隣りに市内最大のデパートが続いていた。利用案内は日本語を含む多国語で書かれ、利用者用端末は20台程並べてあった。

バスは1ゾーンの定期券で広範囲に乗れ、時間もきちんとしていて便利だったが、運転手さんはバス停名を全然言ってくれないし、道路の標識も「Bus stop」のみだったので、私は緊張して窓の外を見ていた。運転手さんは親切だった。乗る時「Good morning」と言ったら「オハヨウゴザイマス」が返ってきたり、乗り過ごしそうになると顔を見て教えて貰ったことも何度かあり、帰る日に「Today's my last day. I appreciate very much」と言ったところ、「Have a good trip」とにっこり答えられ、私は very happy だった。

おしゃれな、図書館

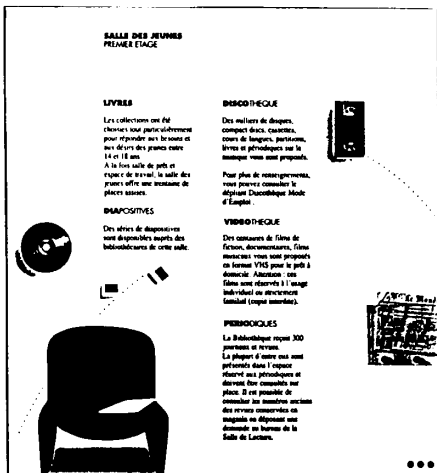
アヌシーという町へいった。フランスとはいっても、ジュネーブから南へバスで45分。パリからだとはTGVで3時間半。スイスの雰囲気濃厚な町である。8日間ほど滞在。町のほぼ中心にあるボンリュイという名の国際コンgres・センターに毎日かよったが、ここに市立図書館があった。

商売柄、ふらっと立ち寄ってみたが、センター1階の人々が一番行き来する場所に入があるので、少しでも図書館に興味がある人なら、誰でも立ち寄りざるを得ない。図書館としては、最高のロケーションにあるといえる。

入口のあるメインフロアを中心に、上下に1階ずつ、全体では3階の造りになっているが、入口付近が大きな吹き抜けになっていて、そこにゆったりとした階段があるので、3つの階が有機的につながっている感じがする。各フロアも全体としてゆったりとした造り。また、調度品も館全体の造りに合わせて選んであるようだ。特に、書棚のデザインが素晴らしく、配置も良く考慮されていた。

おしゃれ、というのが第一の印象だし、ここに掲げたパンフレットも、おしゃれ。左図のLa Bibliothèqueの文字の上は、書棚を上方から見たところ。BIBLIOTHEQUE MODE D'EMPLOIの文字のある側をめくると、この書棚を覗き込んでいる人物が現われる、という次第。

この本館のほかに、人口十万ほどのアヌシーの町には、4つの分館があるとのこと。町そのものは、アルプスのふもとの湖のわきにひろがり、その湖から流れ出た水の通る運河沿いは、中世のたたずまいを残している。フランス語の読める人は、おしゃれなりゾート地の、おしゃれな図書館で読書にふける、ということが出来るわけ。利用状況の方はというと、こちらは静大の図書館と同じ。ビデオとCDのところは圧倒的な人気。雑誌の場所も人が多かったが、文学のところは、今ひとつ。ところ変わリ、図書館の造りが変わっても、文字離れという傾向は同じらしい。(N)



BIBLIOTHEQUE
MODE D'EMPLOI



<図書館職員海を渡る>

映画博物館ふたつ

望月信夫

パリとロンドンのことを書く。図書館職員としてはビブリオテーク・ナショナルやブリティッシュ・ライブラリーを訪れたと書きたいところだが——後者の、例の円形の大閲覧室は眺めさせてもらった——ここでは、このふたつの都市にある対照的な映画博物館について述べようと思う。

パリのシャイヨー宮内にある映画博物館は、毎日5回、学芸員の案内によるツアー形式によって見学する。入口に集まった20名程の参加者に学芸員がたずねる。「どこから来たか?」。アメリカ、ポルトガル、イタリア、カナダと、ユーゴの3人づれ。フィリッピンのカップルに日本人が4名。さすがパリ、とその国際的な顔ぶれに感心していると、「では、始めにフランス語で説明し、そのあと手短かに英語で話す」と言う。

ひとりを除いて、フランス語はもちろんのこと英語も不自由な日本勢なので、どちらにしる関係なし、と思ってついていくが、パリに来たらルーブルよりもシネマテークという人種なので、展示物を目の前にした説明、けっこう耳に入ってくる。学芸員に対する反応は、日本勢が一番である。

全体が60位の部屋にわかれ、そのおのおのに映画史のトピックスを記念する展示物が置かれているが、映画史以前のエミール・レイノーのプラキシノスコープ、ロッテ・レイニガーの影絵といったものも混じっており、映画史を知っている人にとっては興味津々だとしても、一般の人には少々地味目。加えて、学芸員の説明も少なからずアカデミックな内容(のよう)で、我々だけが反応するのもいたしかたない、といったところ。次第に英語での説明が長くなっていく。

気がつくやうに、当方も学芸員に話しかけておりミュージカルの部屋に至って、「昨日の夜中、テレビでアステアをやっていたので、つつい最後まで見てしまった」というと、学芸員も、「自分も同じで、実は眠たい。」

「今夜は、ホテルの近くの映画館で、ゼツタイに Funny Face をみる。何故なら、Funny Face の日本での題名が Lovers of Paris だから。」

大喜びの学芸員は、シネマテークを覗きたい、という我々の希望を、(かつてゴダールやトリュフォーがそうしてもらっていたように)タダで入れてくれることによってかなえてくれた。

少々マニアックな内容と、アットホームな雰囲気のパリに対し、ロンドンにはハイテクで迫ってくる。こちらにも多くの部屋にわかれ、そのそれぞれで映画史のトピックスを提示する、という形は同じだが、どの部屋にも<スクリーン>があって、動く映像がある。見学者がSF Xの登場人物になることが出来る装置もある。博物館の全部の映像をコントロールする部屋さえ、ひとつの展示物になっている。行った日が日曜日だったこともあるが、大混雑で、特に子ども達が喜んでいただろうが、展示の水準は決して低くなく、世界で最初の70ミリ映画が、1910年代に作られていたことを提示していたし、日本映画に関しての展示も、きわめて妥当な線を

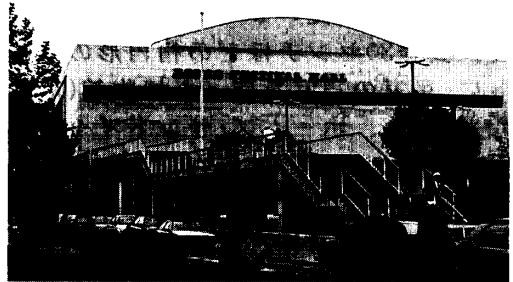
いていた。

MOMI (Musium of Moving Image) という名称が示すように、ここの大きな特徴は、映画だけではなくテレビについて、そして最新のハイテク映像に関する展示に力が入れていること。テレビ作品について、これだけまとまったものは他にはないと思われる。行ってみて、まずソンはない博物館といえようが、実は、この博物館でもっとも興味深かったのは、その立地。

パリの方も、シャイヨー宮といえば、エッフェル塔の真下。「パリの恋人」でも重要なランドマークとなっていたが、名所・旧跡のイメージが強すぎて、作品と場所とが特別に結びつくということはない。

こちらの方は、ウォータールー駅から歩いて5分の場所。地下鉄のウォータールー駅に着くや、階段をかけ昇って国鉄駅の正面玄関で記念撮影。アビー・ロードでパチパチやっているポピュラー・ファンをケイバツ出来ないことになる。(ちなみに、駅と博物館との間にロイヤル・フェスティバル・ホールがあり、クラシック・ファンとしては1枚パチリとやった)。博物館への道を、更にそのまま進むとウォータールー・ブリッジ。博物館をでたあと、すぐさまそこに向かったのは、いうまでもない。

ここら当りに、たたずんでいたんですね。「哀愁」のヴィヴィアン・リーが。ソンはない博物館と、いかにもガイドブックでの穴場紹介風の口調を使ったが、実際のところをいえば、この博物館が他の場所にあったら、ロンドンでの半日をつぶして、わざわざ訪れたかは、さだかでない。



<図書館職員海を渡る>

シャロック・ロード

ロンドン経由でスイスへ行こうとしてた矢先、次のような記事が目にとまった。「今年は、シャロック・ホームズがスイスのマイリンゲン近くのライヘンバッハ滝から落ち行方不明になった時から、ちょうど100年、記念行事が・・・」

かつて The Baker Street Journal誌の購読をしていたこともある身としては、ベイカー街を訪れたその足で、ライヘンバッハ滝におもむく、という決心をする。

ホテルを出、リージェント・パーク沿いに歩き、マダム・タッソーの臘人形館を通り過ぎると、ベイカー街だが、地下鉄駅の表示が無ければ、通過してしまいそうな何の変てつもない一角である。

地番表示に従い221Bに近づいて行く。長径30センチほどの楕円形のプレートに、民家の一室を使った博物館(のようなもの)と、ホームズ・サンドイッチの店が一軒。このそっけ無さ、これはなんだ、である。

ホームズ一行は、インターラーケンから入ったようだが、筆者は反対方向のルツェルンからマイリンゲンに向かった。スイス国鉄のゴールデンルート^①の東半分

を占める車窓の景色は最高。

で、滝はといえは、こちらの方もそっけ無く、滝にのぼるケーブルカーにも終点の駅にもホームズうんぬんの表示はなし。滝を囲む絶壁に置かれたホームズが落ちたといわれている場所を示す星印を見つけるまでに、5分近くの時間を費やしてしまった。わが国なら、いやが上でも目立つ案内版でもたてるところ——。

マイリンゲンの町に戻ってくると、こちらには、ホームズ・ホテルがありシャロックと名付けられたバーナダンスホールに独立した建物の博物館があつて、パイプをくわえた姿の銅像まであった。さらに、1枚0.5フランの絵はがきに、滝つぼの砂と称するものが入ったカプセルが付けられて、5フランという、嬉しくなってしまうお土産さえ売っていた。

観光地は観光地なりに、ある程度のケバケバしさがほしい、と思う一方でベイカー街とライヘンバッハ滝2つの史跡?!のそっけ無さにも、大いに魅力を感じている。(M)

お知らせ

■ 休館

12月24日(火)より1月5日(日)まで

■ 貸出期間の延長

12月2日(月)から1月13日(月)の間に貸出した図書の返却期限は、1月21日(火)とします。

■ 閉館時間の変更

12月21日(土)から1月10日(金)までの間、閉館時間は次の通りです。

平日 午後5時

土曜日 正午